

## 現代におけるニュースポーツの可能性に関する一考察

～競技者間の関係性との関連から～

大隈節子（九州大学大学院）

### 1. はじめに

オリンピックに代表される「公平なルールに基づいた自由競争」を条件として発展してきた近代競技スポーツが、人間の可能性の限界を追求する営みとして現在においても人々の感動を呼び起こす存在であることは疑いようのない事実である。しかし一方で、上昇志向をモットーとし、高度化の歩みを止めることのない近代競技スポーツは、一部の限られた人たちのものとしての色合いを濃くし続けており、一般人の間では何か非日常の世界のこととしての認識が強くなっているようである。また、高度な技術をもつスポーツエリートであるはずのオリンピック競技者の間でも、更なる向上を求める形での「ドーピング」使用の事実は無くなる気配を見せない。これらの問題は競技者の身体・精神両面に重大な弊害をもたらすだけでなく、スポーツに対するあこがれや社会的信頼を著しく損なわせ、「スポーツ離れ」を促進させる要因ともなりかねず、競技スポーツはその存在意義の再検討を迫られているようにも思われる。このような情勢の中で「競争原理」を中核とした近代競技スポーツに対するアンチテーゼの立場からニュースポーツが誕生した時、そこにはさまざまな可能性が期待された。しかし、近年の研究においてニュースポーツの競技スポーツ化傾向が明らかにされており、現代におけるニュースポーツの可能性自体にも曖昧さが露呈しているように思われる。

そこで本研究では、これらの現象を単にスポーツ領域における近代スポーツとニュースポーツの混同として結論づけるのではなく、一度ニュースポーツが誕生した社会的背景を含めて検討した上で、今後のニュースポーツのあり方について考察することを目的とする。具体的には、わが国における社会的関係性が時代と共に根本に関わる部分での変容を余儀なくされている背景について明らかにした上で、最終的に現代社会において求められるニュースポーツとは如何なるものかについての考察を試みていくことになる。

### 2. 社会の変容と関係性の変化

#### 1) 1980年代について

1980年代の日本社会は、「差異」の欲求を喚起することで消費を増長させ、そのことによって経済的發展を遂げた時代である。地域共同体の崩壊と家族への内閉化後の消費社会の到来は、企業中心社会の形成に伴って家族の崩壊までもを招き、個人の居場所を喪失させた一方で、「モノ語り」に代表される「モノ」の所有によって「他者との差異」を表現することが助長され、それによって経済的發展が可能となった時代である。また、1979年の共通一次試験の開始に代表されるように、学校教育も同時に企業の論理（企業戦士の育成）を当てはめる形で能力＝平等主義に基づいた競争を個人へ強制する体制を整えていった。

この当時の近代競技スポーツは全盛期にあった。メディアの後押しを得た形で企業スポンサーとの経済的な結びつきを強めて商業主義化を進行させ、外的環境がスポーツ本来の平等なルールによる競争に対する結果や勝敗を左右するほどの大きな権力へと拡大していった。また、スポーツ科学の発展によって、それまでの非科学的な経験主義に基づいた監督―選手間の関係性や選手間の関係性などに対する懐疑が一般的に可能となり、合理主義的な関係性がスポーツ技術の発展へとつながっていった時代である。このような近代競技スポーツの商業主義化の進行とスポーツ科学領域の発展は、スポーツ競技空間が競技者の自己表現の場として存在することを超えた空間へと変容させ、競技者間の技術に対する承認は、競技者相互の技術的關係性の中で決定されるより以上に、外部の期待に答える形で技術的發展を可能にしていった。これらのスポーツ競技者を取り巻く環境の変化は、スポーツを高度化へと導いたと同時に、その一方では競技者間の関係性を結果や勝敗にこだわる勝利至上主義を過度に助長した形のより競争的關係性へと変化させたことにより、スポーツは一部のエリートのものとしての色合いを濃くしていった。またこのことにより、高度な技術を有する競技者間においても「ドーピング」等の社会的問題を引き起こすことになっていった。

## 2) 1990年代について

バブル経済が崩壊した後に訪れた情報化社会は、これまで以上に差異が生産される社会となり、過剰な情報が錯綜し合う中で現実と虚構の区別が成立しづらい状況が提示される社会となった。経済的發展によって引き起こされた家庭の崩壊後の個人は、自己の居場所を喪失していったと同時に他者との「差異」や「競争」関係を過剰に求められることにより、次第に自己を守るための手段として他者との間の関係性を切り捨てて自らの殻の中へと自閉化を進めるか、あるいは互いの殻を傷つけない表面的な関係性を求めるようになっていった<sup>2)</sup>。

この時代における代表的な現象としての若者のダイエットブームは、単なる個人による一時的な流行ではなく、まさに地域共同体と家族の崩壊によって自己の拠り所を喪失した個人が現代社会を生き抜くための拠り所として自身の身体へと内向し、そしてまたその自己の身体をも社会が与える理想のイメージへと変えていくことで若者が病んだ社会へ過剰適応している状態を明らかにするものであった。中島<sup>3)</sup>は、この時代の若者に特徴的な精神状況をもたらす構造を「コミュニケーション不全症候群」と名づけ、他者とのコミュニケーションの相互性の機会が喪失した社会に特有の症状として位置づけている。90年代半ばの「引きこもり」や「援助交際」といった現象もまた、社会的関係性が病んだ社会に対して若者がとった拒否的な態度、あるいは過剰適応していった姿であった。そしてこのような時代に、過度な勝利志向に対するアンチテーゼとしてのニュースポーツの存在が注目されることになる。

稲垣<sup>4)</sup>は、ニュースポーツを「重厚長大」をめざす「近代スポーツ」へのアンチテーゼとして「軽薄短小」をめざした新たな理念に支えられたスポーツとして捉え、近代スポーツが「競争原理」を中核とした「勝利至上主義」や「記録主義」によって表現されるのに対しニュースポーツを「共生原理」を理念とした「勝敗にこだわら

ない」「いつでも、どこでも、だれでもできる」などによって表現されるスポーツとして捉えている。しかし、その一方で稲垣が述べてもいるように、ニュースポーツが現代社会の問題の解決に寄与するものとしての期待を視野にいれるとき、そこで求められるものは「気軽で競わない」ものへの単なる反転に終わるものではないように思われる。

### 3. スポーツ競技場面における競技者間の関係性

管野<sup>9)</sup>は「闘争は最も生き生きとした相互作用の一つであり、それ自体が人と人とを関係づける社会関係の形成に寄与する形式の一つである」として闘争の存在意義を示唆した上で、スポーツが極めて強烈な闘争であるにもかかわらず、試合終了後にはお互いの健闘を讃え肩を抱き合う光景に素朴な疑問を提示し、スポーツの競技空間は「闘争の原理」と「結合の原理」とが統一した形でもたらされる生の実感を伴った社会的関係性の生成を可能にする空間であると述べている。そして、スポーツ競技空間において「競争」と「共同」が同時に存在可能なのは、お互いの納得のうえに成り立つ「ルール」があるからであり、この相互了解上の「ルール」に則するという行為があつて始めて競技者間に生の実感を伴った競争が生成されることを明らかにしている。

また中村<sup>10)</sup>は、スポーツ技術の種類として、敵と味方のコートの中で他者との位置関係を眺め、自分はどういうプレーをしたらよいかという戦術や、試合の開始から終了までを通したチームの戦略に準じた技術の存在を明らかにした上で、これらのチームの戦略という競技者を結びつけるルールに基づいた技術を達成することにスポーツ技術を習得する楽しさや喜びがあるのだと述べている。このことは、競技者間で技術的向上を競い合うことと同時にチーム力の向上という側面から互いの承認を可能にし、また他人の技術向上によって、自己の技術にも変化が及ぼされることになる。また、集団競技での競技者間のコンビプレーは、自己の身体を超えて他者の身体との間にある関係性の技術であるが、これは自己と他者との関係性のすりあわせの中での関係性のルールが度重なる変更を重ねながらより応用性のあるものへと変わっていくことで達成される。そして、この他者との関係性の中にある技術は、別の競技者との関係性においても応用されることが可能となり、結果的に競技者間の関係性を活性化させると同時にチームという社会集団の活性化へとつながっている。このようにスポーツ競技空間においては、チーム内での競技者間の関係性のルールに限らず、対戦する他者との間で納得のいく形でのルールに則った上で技術が競われる時、競技者間には、「生の実感」を伴う社会的関係性が生成されると考えられる。

### 4. 現代におけるニュースポーツの可能性

1980年代以降の日本社会は、経済的発展と地域共同体と家族の崩壊によって、それまで外部から与えられていた社会的役割に則った形で結ばれていた関係性ではない個人としての存在が目指された時代であった一方で、社会的関係性の存在が極端に希薄化されたことによって他者との社会的距離感覚を喪失しつつある個人の存在が露

にされている現状にあり、これらの現代人が新たな関係性の生成を可能にするためのスポーツのあり方が今後のニュースポーツに求められているように思われる。具体的にこの問いは、外部から付与される「～として」の役割が剥ぎ取られた後に現れた差異のある個人が、ニュースポーツを通して社会的関係性を生成させることが可能かという問題へと還元されるのではなかろうか。

そして、このような視点から今後のニュースポーツの可能性を考えるならば、ニュースポーツの競技場面に競い合うことを取り入れることは、競争が個人の主観的な動機を客観的で社会的な価値へと創り変えるための手段となる側面を持ち、社会的関係性を生成するという意味でそのすべてが否定されるものではないように思われる。

しかし、ニュースポーツで競争を用いて社会的関係性を生成させるためには、近代スポーツにおける差異を生み出すためのルール設定ではなく、競技者間での社会的関係性を生み出すことを目的としたルール設定が必要であり、身体能力の差異によってルールを変更するなど、勝利への可能性が平等であることが保証されることが重要であると思われる。

## 5. さいごに

以上、ニュースポーツの可能性について、現代社会における社会的関係性の変化との関連から検討した。ニュースポーツには、関係性の生成の場としてのスポーツ本来の姿に変更を加えることによって、社会的距離感覚を見失いつつある現代人の生の実感を呼び戻す力が十分に認められると考える。

## 6. 参考引用文献

- 1) 天野義智 1991 「アイデンティティの領域変容」 思想 pp.45-81.
- 2) 3) 豊泉周治 1998 「アイデンティティの社会理論」 青木書店
- 4) 稲垣正弘 2002 「スポーツ文化〈現在〉を探る」 業文社
- 5) 管野 仁 2003 「ジンメル・つながりの哲学」 NHKBOOKS
- 6) 中村敏夫 1997 「現代スポーツ論」 大修館書店